

宗教心理学研究会ニューズレター

第17号 2013.1.25

宗教心理学研究会

Society for the study of psychology of religion

目次

第 10 回研究発表会報告	報告 酒井克也	1
一日は千日にまさる恵み	西脇 良	8
「宗教心理学研究会—10年間の外部発信を振り返る—」の話題提供を終えて	松田茶茶	10
今、問われる「宗教」の役割	中尾将大	11
宗教心理学と私、そして宗教心理学の新たな可能性	島蘭 進	13
どのようなテーマが浮上し共有されたのか	葛西賢太	14
日本心理学会第76回大会ワークショップ「宗教心理学的研究の展開(10)		
—宗教心理学研究会発足10年目を迎えて—に参加して	岡田正彦	15
大切なものを求め続ける仲間たち	森 真弓	16
事務局からのお知らせ		18

第 10 回研究発表会報告

報告 酒井克也(出雲大社和貴講社)

専修大学生田キャンパスにて開催された第 76 回日本心理学会の最終日である 2012 年 9 月 13 日(木)の 13:00 ~ 15:00, 第 10 回研究発表会「宗教心理学的研究の展開(10)—宗教心理学研究会発足 10 年目を迎えて—」が行なわれた。記録的な猛暑の中にもかかわらず、多くの方々にお集まりいただいて研究発表会が始まった。今回は、大きな節目となる 10 年目を迎え、これまでの当研究会の歩みを振り返りその意義と成果を検討するとともに、これからの宗教心理学的研究のあり方について検討するという趣旨をもって開催された。

司会進行の松島公望先生(東京大学)により開会宣言ならびに発表者の紹介がなされ、各発表

者の話題提供へと移った。

1. 話題提供

1-1. 『研究会発足時の様子および 2005 年度科研費プロジェクトに関する報告』: 西脇 良(南山大学)

①研究会立ち上げに関する経緯

2003 年 7 月のメーリングリスト立ち上げをもって発足した本研究会のそもそもの発端は、当時横浜国立大学の大学院生であった松島公望氏との、日本青年心理学会第 7 回全国大会(1999 年 10 月、立教大学にて)での出会いであった。心理学視点からの宗教性研究に孤立感を覚えていた報告者にとって、宗教性発達の問題に真正

面から取り組んでいる氏との出会いは飛び上がるほど嬉しかったことを思い出す。研究者ネットワークの立ち上げの必要性を語り合い、松島氏自身の行動力と人脈づくりにより着々と準備がすすみ、研究会の発足をみた次第である。研究会の会長として、社会心理学の視点から日本人の宗教性を研究し、国内外にもその成果を発表してこられた金児暁嗣氏をお迎えできたことも、研究会の社会的プレゼンスを確固たるものとしたといえる。研究会は、発足当初から近接領域を意識し、社会心理学・社会学・宗教学等からの参加を呼びかけた。この点が、本研究会の質的な成長を涵養し続けている、といえるだろう。

②2005年度科研費研究の概要報告

徐々に会員が増加し、研究会としての体制も整いつつあった2005年、研究会は公的資金を受けた研究に取り組んだ。「研究成果の社会への発信・貢献」を意識する契機となったという点で、この科研費研究プロジェクトは画期的な出来事であった。研究題目は「宗教心理学の体系化に関する研究—宗教心理学の社会的貢献にむけて—」であり、本研究会の強みの一つである学際性(同居性というべきか)が映し出された、意欲的な体系化の試みであった。研究チームは、研究代表者(発表者)、研究分担者9名、研究協力者5名により構成された。

研究の目的は(1)情報交換および研究交流、(2)宗教心理学の体系化への準備、(3)学問上の貢献に向けた準備、(4)学会設立準備、の四点を挙げ、それぞれの研究計画として(1)研究発表会の開催、ニューズレターの発行、データベース化、企画会議の開催、メーリングリスト上での議論、(2)文献研究、(3)調査研究、(4)年会費制度導入の検討、とした。研究期間は一年間で、やや短い感もあったが、これらを精査したことが、その後の研究会の活性化につながったのではないだろうか。

(1)の成果としてはメーリングリストを通じた研究者間の交流の活性化や会員の情報共有、次年度の科研費申請への流れ、日本心理学会等における研究発表会や公開研究発表会の開催、

ニューズレターの発行など。(2)の成果は、「文献研究チーム」によってなされた「現代社会の問題で宗教心理学の対象となりうるテーマ」の収集とグルーピング(排他性・偏見・攻撃性、死に関わるテーマ、精神的健康と心理療法、教育・道徳性、生涯発達、進化、脳科学・認知科学、性・ジェンダー etc.)、および、グルーピングされたテーマ毎の研究レビュー。(3)については、2度実施された予備調査の結果分析を通じた「社会問題への宗教の貢献可能性」「宗教性とSpiritualityのイメージとその相違」「宗教心理学に対する関心」の検討。(4)については、2006年4月からの年会費制実施などが挙げられる。

1-2. 『研究発表会および公開講演会、公開シンポジウムに関する報告』松田茶茶(関西保育福祉専門学校)

発足後10年の間に本研究会が歩んだ足跡を、「研究会外部への発信」の観点から振り返る。外部発信の方法として本研究会は、研究発表会(日本心理学会ワークショップ)、公開講演会(旧公開研究発表会)、公開シンポジウムという3つの方法を用いてきた。またそれ以外にもイレギュラーではあるが、国際シンポジウムの開催、および「宗教と社会」学会におけるテーマセッション参加をおこなってきた。(延べ10回の研究発表会、4回の公開講演会、1回の公開シンポジウム、1回の国際シンポジウム、1回のテーマセッションがおこなわれている。)現在のところ、研究会としての成果の発信ではなく、研究会に所属・参与するメンバーの個々の活動や研究成果を、その都度設定されたテーマに沿って集散的に発信している。つまりそれは、本研究会の「マンパワー」の外部発信と言える。それぞれのテーマと開催時期、開催場所、開催者(企画者)、話題提供者等を一覧し、それぞれの会におけるテーマ変遷、ならびにその変遷を生じさせた研究会内外の動向要因の考察を試みる。

(註 ... 紙面では開催場所、開催者、企画者、及び司会者等は割愛させていただきます。所属は、その当時のものを記載しています:酒井)。

①研究発表会(日本心理学会ワークショップ)

●第1回「宗教心理学的研究の展開—その歴史と現状—」2003年9月15日 話題提供: 杉山幸子(八戸短期大学)・西脇 良(南山大学)・松島公望(東京学芸大学) 指定討論: 作道信介(弘前大学)・金児曉嗣(大阪市立大学)

..... これからどういうことができるのだろうか、というテーマの検討の意味を持つ。

●第2回「宗教心理学的研究の展開(2)—宗教心理学の研究手法の検討—」2004年9月12日 話題提供: 杉山幸子(八戸短期大学)・渡部美穂子(大阪市立大学)・西脇 良(南山大学)

指定討論: 堀江宗正(聖心女子大学)・金児曉嗣(大阪市立大学)

..... 具体的なテーマを、どう扱うかという段階。

●第3回「宗教心理学的研究の展開(3)—宗教意識研究の現在—」2005年9月12日 話題提供: Djumali Alam(山口大学)・岡村宏美(神戸大学)・松田茶茶(神戸学院大学)・河野由美(藍野大学) 指定討論: 齋藤耕二(東京学芸大学)

..... さらに具体的な「意識」というテーマを、心理学以外からも検討した。

●第4回「宗教心理学的研究の展開(4)—心理学に根ざし、社会寄与を目指すには—」2006年11月3日 話題提供: 藤島 寛(甲南女子大学)・徳田英次(桐蔭横浜大学)・川島大輔(京都大学) 指定討論: 森岡正芳(奈良女子大学)

..... 科研費研究の翌年にあたり、そのテーマを意識した。

●第5回「宗教心理学的研究の展開(5)—社会との関わりの中ではたらく宗教心理の可能性—」2007年9月18日 話題提供: 橋本広信(群馬社会福祉大学)・岡田正彦(栃木県立岡本第病院)・松島公望(東京学芸大学) 指定討論: 森岡正芳(神戸大学)・恩田 彰(東洋大学)

..... 青年、発達、臨床心理学等、まったく異なる角度からテーマを掘り下げた。

●第6回「宗教心理学的研究の展開(6)—死生学と宗教心理学の相互関係性を探る—」2008年9月20日 話題提供: 大村哲夫(東北大学)・浦田 悠(京都大学)・松田茶茶(神戸学院大学)

指定討論: 川島大輔(国立精神・神経センター)・田畑邦治(白百合女子大学)

..... 死という幅広いテーマを、包括的にとらえることができた。

●第7回「宗教心理学的研究の展開(7)—様々な研究分野、領域から見た宗教心理学とは—」2009年8月27日 話題提供: 葛西賢太(宗教情報センター)・中野美加(同志社大学)・石井賀洋子(中部大学)・佐藤壮広(立教大学)・中尾将大(大阪大谷大学)・荒川 歩(名古屋大学)

..... 心理学にとらわれず、広い観点から宗教心理学をとらえなおした。

●第8回「宗教心理学的研究の展開(8)—死生の意味するもの: 生と死を見つめる宗教心理学—」2010年9月21日 話題提供: 辻本 耐(大阪大学)・川島大輔(国立精神・神経センター)・大村哲夫(東北大学)・中里和弘(大阪大学) 指定討論: 田畑邦治(白百合女子大学)

..... あらためて「生と死」の問題を掘り下げた。

●第9回「宗教心理学的研究の展開(9)—仏教(仏教徒)と宗教心理学—」2011年9月16日 話題提供: 横井桃子(大阪大学)・武田正文(浄土真宗本願寺派 高善寺)・中尾将大(大阪大谷大学)・太田俊明(西山浄土宗教学研究所)・葛西賢太(宗教情報センター) 指定討論: 恩田 彰(東洋大学)

..... 特定の宗教に絞ったテーマを試みた。

●第10回(今回)「宗教心理学的研究の展開(10)—宗教心理学研究会発足10年目を迎えて—」2012年9月13日 話題提供: 西脇 良(南山大学)・松田茶茶(関西保育福祉専門学校)・中尾将大(大阪大谷大学)・酒井克也(出雲大社和貴講社) 指定討論: 島藺 進(東京大学)・森岡正芳(神戸大学)

.....10年間の歩みを振り返る。

②公開講演会(旧公開研究発表会)

●第1回「宗教心理学的研究の現在」2005年10月16日 研究発表: 西脇 良(南山大学)・杉山幸子(八戸短期大学) 指定討論: Michael Calmano(南山大学)・渡辺 学(南山大学)・加藤司(東洋大学)

..... 指定討論、質疑応答などが最も白熱した、印象深い講演会だった。

●第2回「宗教心理学的研究の現在-2-」
2007年11月24日 研究発表:葛西賢太(宗教情報センター)・川島大輔(国立精神・神経センター) 指定討論:星野 命(国際基督教大学)・田畑邦治(白百合女子大学)・井上順孝(國學院大学)

..... 多角的な指定討論が充実した。

●第3回「祈りの心理—祈りについて考えてみよう—」
2009年6月27日 講演:齋藤耕二(東京学芸大学)・田畑邦治(白百合女子大学)

..... 公開講演会という形をとった最初の試み。

●第4回「宗教性発達研究の謎を探る」
2010年6月26日 講演:恩田 彰(東洋大学)

..... 指定討論などを行わず、じっくり講演を聞く形態を取った。

③公開シンポジウム

現代のスピリチュアリティを斬る スピリチュアリティに関する心理学的考察—若手研究者の「宗教とスピリチュアリティ」討論会—
2011年6月11日 話題提供: Masami

Takahashi(Northeastern Illinois University)
コメンテーター:荒川 歩(武蔵野美術大学)・中尾将大(大阪大谷大学)・菅原研州(曹洞宗総合研究センター)

..... 今後の展開が計り知れないという印象。

④国際シンポジウム

「科学研究における信仰の機能」
2008年6月14日 話題提供: Werner Gitt(元ドイツ連邦物理学・科学技術研究所所長)・高木宣秀(龍谷大学仏教文化研究所) 指定討論:森岡正芳(神戸大学) 通訳:葛西賢太(宗教情報センター)

..... まさに最先端の深いテーマだった。

⑤「宗教と社会」学会テーマセッション

「宗教心理学を考える」
2008年6月15日 話題提供:安藤泰至(鳥取大学)・堀江宗正(聖心女子大学)・高橋正実(イリノイ州立ノースウースタン大学)・西脇 良(南山大学) 指定討論:齋藤耕

二(東京学芸大学)・深澤英隆(一橋大学)・川又俊則(鈴鹿短期大学)

..... 心理学中心の場ではないところで、宗教心理学をとらえなおした。

1-3. 『ニューズレターの変遷から「研究会10年の歩み」を振り返り、迎える「発足11年目以降の方向性」を模索する』:中尾将大(大阪大谷大学)

ニューズレターはすでに第16号にまで及ぶ。その内容は「ニューズレター」の域を超えて「学術誌」としてもいいのではないかと思われる程、充実した「知の結晶」である。特にこの分野の初学の者や若手研究者にとっては教育的かつ示唆的な要素、情報を多分に含んでいると思われる。また、本研究会には専門を異にする多くの研究者が在籍し、あらゆる視点や情報、示唆も紙面に盛り込まれているので、様々な専門分野の立ち位置から宗教心理学にアプローチする方々にとって、このニューズレターは、こころ強い「水先案内人」となるに違いない。当研究会のニューズレターはまさに「宗教心理の宝石箱」と言えるだろう。それらの情報を整理整頓することは「宗教心理学のメジャー化」と「研究者人口の増加」に寄与できると考える。将来、本研究会が「日本宗教心理学会」となった時、ニューズレターが組織の支柱となり、未来に向けての羅針盤になると信じる。研究会発足10年を記念して、その変遷を振り返ることは本研究会の歩みと成長を振り返るということになる。さらにこの組織の未来への方向性を探ることにもなると思われる。

①ニューズレターの基本的構成と活用法、および将来の形

基本構成:・研究会、公開シンポジウムの報告(具体的な研究内容)・指定討論と質疑応答(研究会、シンポジウムの内容理解)・感想(当日は語られなかった視点と情報)・関連する話題(寄稿・テーマの拡大と情報提供につながる)

問題点:表題が具体的でない(ニューズレターのバックナンバーのタイトルをホームページ等に掲載しても、「会合に参加して」のような題名が並んでいると、せっかくの素晴らしい内容が伝わらな

い)。⇒ある程度内容やポイントがわかる表題に変えることが望ましい。今回のバックナンバー整理作業を通して、出来る限り試みたので、参照されたい。

活用法:・バックナンバーを見ながら、自分の興味、専門分野に照らし合わせて参考となるニューズレターを選択する(PDF化されたファイルをHPでダウンロード可能)・参考資料や文献を利用できる・執筆者や発表者、事務局に質問等もできる(会員となることが望ましいが)

将来の形:・研究会、公開シンポジウムなどテーマ別に分類し、公表(小冊子に)＝学会昇格後の「学術誌」への準備段階・小冊子＝肩がこらず、どなたにもわかりやすい(事務局[あるいは編集委員会を立ち上げ]通じて販売＝活動資金)・論文や著書紹介のコーナー、書評コーナーの設置(これまでは単発的であった)＝啓蒙書としての役割・研究会・シンポジウムの話題提供の内容を「報告書」でなく、「ショートペーパー」に・将来的には会員を中心に「投稿論文」を掲載してゆく(編集委員会の立ち上げ＝「宗教心理学研究会誌」へと発展させては？ただしマンパワーの問題もある)

②変遷から見えてくる研究会展開の姿

初期: 宗教心理学の研究手法の模索(1): 宗教学的宗教心理学と心理学的宗教心理学

中期: 宗教心理学とは何かを問う(定義)(2)

最近: 各専門分野からの研究発表の展開(3)

現在も(1)と(2)の完全な確立には至っていない。しかし(3)を展開しながら(1)と(2)について求め続け、問い続けているのではないかと。→常に「宗教心理学とは何か」を問い続け、苦しみ悶えながら歩んできた10年とも思える。

③結論

少しずつ、各専門分野からの成果を積み重ね、宗教心理学とはどのような学問分野か、そして、その研究方法にはどのような方法が望ましいのかを明らかにしてゆくしかないのではないかと。その先に我が国における宗教心理学の姿、その目的もみえてくることだろう。歩みは遅いが、焦ら

ず、着実に進んでゆくしかない。

1-4 『懇話会、ワーキンググループ、勉強会、研究例会に関する報告』酒井克也(出雲大社和貴講社)

入会して一年を経て実感することは、研究の種やチャンスというものを得るには、「人」とのご縁が大事なのだということである。この一年間は、研究会の人と接するたびに「あ！ここを掘ればいいのか」「こんな掘りかたもあるのか！」という刺激の連続だった。そうしたスパークは、懇話会、ワーキンググループ、勉強会、研究例会などのいたるところで発生する。あるときには、休憩中のトイレでの会話で起こった。研究とは(少なくとも宗教心理学の場合は)孤独の中で行なうものではなく、人と接し、コミュニケーションし、情報と感情を交流させる中に行なうものだと悟った。今後も積極的にこの環境を活用するつもりである。

①懇話会、その意義

当研究会の懇話会の最も素晴らしい特徴は、発表者の様なかけだしの人間から、著名な研究者までが、一切の垣根を払ってコミュニケーションが出来るという点である。著名な先生方が皆謙虚で紳士的なのも特筆すべき点で、まさに「人格者集団」である。新参加者を歓迎する風潮も肌で感じた。これから研究を始めようとする者にとって、先輩方と直接コミュニケーションができることは、血の通った情報と言うか、その人が行ってきた研究の難しさや楽しさ、喜びなどが共感できるという、かけがえのないメリットがある。研究や論文は一人の力で生まれるものではなく、多くの人々の協力があってこそその世界なのだとうことが良く分かる。それはまさに、「浪花節」的な世界だ。2011年9月16日、初めて参加させていただいた懇話会で、東洋大学名誉教授の恩田彰先生がおっしゃった、「研究は楽しく。学会を目指してがんばってください。」というお言葉は、今でも強く胸に刻まれている。

②ワーキンググループ、その意義

不定期ながら着実に行なわれるワーキンググ

グループは、研究会としての活動の基盤、土台と言える。毎回、超多忙の先生方による、手弁当で白熱したミーティングとなる。忌憚のない、しかし建設的かつ紳士的な議論は、研究の「場」を創り、維持するための知恵が詰まっています、本当に勉強になる。第1回から第5回までのテーマは以下の通り。

- 第1回：2011年10月29日 主な議題：勉強会の形式、開催時期、場所について 10年を振り返って
- 第2回：2012年1月21日 主な議題：勉強会の内容 ホームページの管理、更新について
- 第3回：2012年3月24日 主な議題：関西主導の勉強会、ML等の立ち上げについて
- 第4回：2012年5月26日 主な議題：科研費プロジェクトについて 日本心理学会発表内容について
- 第5回：2012年8月19日 主な議題：科研費プロジェクトに関する報告

③勉強会、研究例会、その意義

ワーキンググループと同時にされる勉強会では、様々な立場から見た、宗教心理学の多角的な解釈と理解の場である。現在は、東京大学駒場キャンパスにおける『宗教心理学概論』読書会と、関西地区の研究例会が並行して行なわれている。どちらも、多角的な意見交換が盛んで、研究のネタの宝庫。

●東京大学駒場キャンパスにおける『宗教心理学概論』読書会の内容等

- ・2012年5月26日(酒井克也 第1章イントロダクションと研究方法論)
- ・2012年8月19日(岡田正彦 第7章宗教とメンタルヘルス)

●関西地区研究例会の内容等

- ・2012年7月8日[日本人における「写経行動」の再検討 ―質的観点から―]中尾将大(大阪大谷大学) 「自殺に対する社会規範と宗教の関連性―マルチレベルモデルを用いた国際比較―」横井桃子(大阪大学人間科学研究科)]

④これからの宗教心理学研究会に期待すること

この研究会の素晴らしいところは、「宗教心理学」というキーワードに反応する、本当に多種多

様な人材が集結している点だ。そのジャンルは、心理学(発達、教育、臨床、社会 etc.)、宗教学、社会学、民俗学、比較文明学などなど、立ち位置も違えば研究方法も様々。まさに研究者の「るつぽ」である。しかも、各人がかなり高水準の研究実績を持っており、日本国内のみならず、世界の学界、雑誌などにその名を連ねている。この事実も、ものすごいことである。

組織は、大きくなるとその質を変化させざるを得ないのが世の常だが、わが宗教心理研究会においては、ますます個性的人材に対してすそ野を広げ、人数を増やし、多様性の塊となりつつも、ニューカマーに対して歓迎の息吹を感じさせ、自由にコミュニケーションが出来る場であり続けてほしいと思う。そして今後、研究法、内容、各人のモチベーションなどが世界水準に達し、世界に誇れる「学会」となって欲しいと切に願う次第である。

2. 指定討論:

2-1. 島蘭 進(東京大学)

私は宗教学の人間だが、今は死生学のほうへ移行してきている。また、宗教と距離を置いて研究する立場から、宗教者の方々と深くかかわりながら研究するほうへとスタンスも変わってきた。東北大学では、東北の大震災の被災者の心のケアのために地元の宗教者、医療者、研究者が連携して行なってきた「心の相談室」の活動から、実践宗教学講座というのが出来、宗教者もカウンセリングを中心とした心理学のコースを受ける流れになっている。また一方で、スピリチュアル・ケア学会においては、医療従事者にスピリチュアル・ケアの資格認定を与えるコースを作り、来年の国際学会化を模索している。

私は、そうした活動に関わる中、1960年代のホスピス運動、臨死体験研究などを中心とする転換期と同様、死生学や宗教心理学が一大転換期を迎えていることを痛感する。死にゆく人々のケア、グリーフ・ケアなどに関する講演会の参加者が増えている。また、精神医療と宗教心理学の接近も著しくなっている。今や、末期の病気や精神疾患などを、出来るだけ病院に頼らず、地域社

会で(在宅で)ケアをしようという流れがあるが、そうなると、心理を理解する宗教者やボランティアの活動が必要となる。ホームレス化や自殺の防止などにも、宗教心理学は深くかかわってくる。

スピリチュアリティということ言うと、1960～70年代にあった「ニューエイジ・ムーヴメント」が日本にも広がり、オウム事件などで下火になったと思われていたが、実はそうではなく、既成の宗教に変わるものというよりも、今では伝統的宗教においても「スピリチュアリティは大事だ」と言うようになって来ている。AAなどの活動もそうだが、信仰や精神的健康などを考える場において、不可欠な要素になってきている。そうした流れで自分も東北の支援などを通して、深く宗教者たち、支援者たちと関わるようになった。昔は、participant observation と言い、参加することと観察することが引き裂かれていた感覚があったが、今では、積極的に一員として行動しながら研究する時代となって来た。その中で、自分の主体的な死生観を『日本人の死生観を読む』(朝日選書 2012.2.25.発行)にまとめた。

2-2. 森岡正芳(神戸大学)

昨年の大震災などで、様々な世界が大転換期を迎えている今、宗教心理学研究会が10年の節目を迎え、その業績を振り返るという記念すべきシンポジウムを開催したことは、大変素晴らしい。この10年私たちは、人間の崇高な活動である宗教と、また人間の非常に繊細な働きと、多様な対象を扱う心理学がどう関わるべきかを模索してきた。それを踏まえて、これからどのように展開をしていくべきかを考えたい。

私は、心理学ワールドの編集をしているが、59号の特集が「スピリチュアリティ」である。

このテーマを私が提案したときにも、委員会ではすんなりと合意を得た。今の世の中が、こうしたテーマを求めているのがわかった。

宗教の世界でも心理臨床の現場でも、「魂」をどうとらえるかという流れが出来ている。だからこそ一方で、綿密な尺度を使った研究が求められてもいる。その点では、この研究会がやってきた

業績には、とても良いものがある。それらを基盤として、今後どう展開していくかは重要なことである。

まず、心理学の世界において宗教を扱うことの危うさを再確認したい。心理学に求められる科学としての再帰性、反復再現性などを、宗教の世界にどう見つけ出すか。その点をクリアしなければならない。私も大学で宗教学を専攻したのちに、臨床心理学に方向転換した経験がある。方法の限界を試されるようなテーマである点を、宗教学者も心理学者も、ますます忌憚なく論議を進めることが不可欠であろう。

その上で、各論の部分をより充実させていくことが望ましい。例えばカルトの問題は緊急の課題であるし、宗教の活動の歴史には、死や性愛に関わるものや言葉にしづらいようなものが潜んでいる。そこに救済や「飛び越え」否定的なものを契機にして、肯定的なものへ抜け出るところがある。そうした部分に、あえて切り込むことで、創造性も生まれてくる。

その意味では、多くの宗教人や宗教体験者の伝記や記録などを研究するというのも、一つの重要なテーマであろう。そこには、救済のための一見逸脱した、ハチャメチャな行動や体験も数多く含まれていよう。それをもっと取り上げるべきではないか。宗教学の世界でそうした研究を続けている人もあるが、どうしても特殊な研究と見られがち。しかし宗教心理学であれば、例えば精神分析等で解明することが出来ると思われる。もともと精神分析が宗教性と非常に密接に関わって理論展開したものだったが、日本ではそこを切り離す風潮がある。ヘブライの思想などは、精神分析に限らず心理学の根源だともいえる。またフランスの心理学などは、カトリックの信仰が土台となっているのは明らか。でも、宗教学も心理学もそこに目を向けない。だからこそ、宗教心理学にはチャンスがある。面白さがある。仏教の諸派の心理観の違い、神道と日本人のメンタリティ、古事記と心理学、いくらでも面白いテーマが見えてくる。それらが、学問の「生命力」を生み出すということを忘れてはならない。歴史の中に埋もれているテーマを、どれだけ掘り起こせるかが、今後

の研究会の発展のカギであろう。

3. フロアを含めた質疑応答

駒沢大学の加藤先生より、宗教心理学の研究者と、仏教心理学の研究者、あるいはその他の宗教の研究者などの間の「没交渉」の問題が指摘された。お互いが貴重な歴史、実績、情報を持っているにもかかわらず、それらが共有されていない点が、この領域の発展を阻害してきたことは明らかなので、今後、よりオープンに関わり合う場を持つべきであるとした。また、宗教心理学がカバーできる「範囲」について意見を聞きたいとのご質問があった。それに対して、中尾先生から、「宗教は人間にとって根源的なものでそれなしでは実は、人間は生きてゆくことはできないのではないかと私は考えています。したがって、ひとが生まれ、育ち、死んでいくすべての営みが宗教と密接にかかわっているといえるでしょう。よって宗教心理学は他のどの分野ともどこかでつながってくるのではないのでしょうか」との返答があった。

続いて葛西賢太先生(宗教情報センター)から、「宗教学会で、経営学の手法を使って宗教を研究している、関東学院大学の経営学の渡辺光一先生というかたが、とても印象深いことを話していた。それは、日本人が「宗教と関わるときに、最も大事にしている要素」を統計的に洗い出したところ、“不可知論”というキーワードが出たということ。欧米で無神論者といえば神の非存在を証明する人ということになるだろうが、日本に多い自称「無神論者」という存在は、実は、神はいないと明言しているのではなく、いるのかいないの

かは留保することを、知的な誠実さ・謙虚さと思いき、尊重する姿勢、つまり不可知論者だということが明らかになったということで、ひじょうに強く印象に残った。この研究会でも、今後“無神論”と混同されがちな“不可知論”というものが、どれだけひろがっているのかを、研究対象とする選択もある。」というお話があった。

続いて松島先生より加藤先生へのリプライとして、「扱う範囲は、今の段階では“良いとこ取り”でいいと思う。はじめから領域を考えてしまうと、他の学問分野との綱引きになってしまう危険性もある。各自が自分の得意とする領域から手を伸ばして、現実的・建設的に研究を深めて行くことが大事なのではないか。」と返答した。

最後に恩田彰先生(東洋大学)より、「高校時代に、心理学、しかも宗教心理学こそが人間を研究する学問であると確信して、今まで研究を続けてきた。が、当時の大学にはそんなジャンルが無かった。やむなく思考とか人格だとか、教育の勉強をしたが、本当にやりたかったのは、宗教心理学だった。他の先生の中には、宗教はいかがわしい、未完成のものだから気をつけろという人もいた。なぜ日本人は宗教を避けるのか。それは、人にとって、自分にとって宗教が最も重要なものであると、無意識的にわかっているからこそ避けるのだと確信している。皆さんは、人類にとって最も大事なテーマを扱っているということを誇りに思っ、楽しみ味わいながら研究を続けて行っていただきたい。」というお話があり、一同襟を正して閉幕となった。

一日は千日にまさる恵み

西脇 良(南山大学)

今回の第10回研究発表会のサブタイトル「—宗教心理学研究会発足10年目を迎えて—」にもあるように、宗教心理学研究会の発足から10年の節目を迎えることになりました。この10年の歩みは、私個人の関与度とも絡み合いながら、長く

も短くも、濃くも薄くも思えてきます。そのような想いもある中で、この節目にあたり話題提供をさせていただけたことを、とても有難く思っております。私の発表では、発足当時の様子や、着手してきた研究活動をごく簡潔に振り返りました。

そもそも研究会は、発足当初から近接領域を意識し、社会心理学・社会学・宗教学等からの参加を呼びかけました。そしてその通り、多分野からの参加をみる事ができています。時には各領域で通用する「ことば」や知識レベルなどが異なっていることにより、互いの立場や考え方を理解することが困難なこともあったように思いますが、「互いを生かし合うための対話」がなされてきました。この特色こそが、研究会の質的な成長を促進し続けている、といえるでしょう。

発表会を振り返って

発表会では、企画者である松島さんの絶妙な進行術に支えられながら、松田茶茶さん、中尾将大さん、酒井克也さんの話題提供が続きました。

松田さんは、「10年間の外部発信を振り返る」というサブタイトルで、研究会の種々の活動内容を振り返っておられました。松田さんにお会いするのも久しぶりとなりましたが、松田さんは、単調になりがちな経過発表にもかかわらず、笑いもしっかり取りつつ(笑)、元気のいい発表をされました。まさに研究会の活力源をみた思いです。

中尾さんは、研究会のニューズレターの分析を通して今後の課題を見つけてゆくという、大変ユニークな発表でした。ニューズレターを俯瞰する中からも、宗教心理学とはいったい何か、その研究方法論はどうであるか、という根本的な課題が浮かび上がってくるのだ、との指摘はずしんと私の胸にも響きました。

酒井さんは、研究会のメンバー同士の交流や勉強会を中心に振り返っておられました。自らを「新参者」と規定しつつ語っておられましたが、私のみるところ、酒井さんの発表ほど研究会の本質——互いを生かし合うこと、成長をやめないこと——を見通したものはなかったのではないかと思います。驚くべきことでした。

その後の指定討論では、島菌進先生と森岡正芳先生が、それぞれ本研究会に寄せる期待を語ってくださいました。

島菌先生は、現代における死への向き合い方を中心に、実践活動も交えてお話し下さいました。先生のご発表で個人的に興味深かったの

は、パワーポイントに次々とご著書の表紙画像が映し出されてくるところでした。このようなプレゼンテーションが初めてでしたので、斬新な印象を持ちました。やはりプレゼンテーション力が大事なな、と改めて実感しました。

森岡先生は、一人ひとりの発表についてコメントをしてくださり、多岐にわたるご指摘を下さいました。その学識の深さから溢れ出す先生のことばには、ただただ圧倒されるばかりでしたが、と同時に、本研究会に温かいエールを送ってくださっているのが分かり、大変嬉しく感じました。

その後、フロアからのコメントがありましたが、中でも、葛西賢太さんの発言に同感いたしました。正確な内容として覚えているわけではありませんが、無宗教とか宗教的懐疑の広がりや実質を問う課題に触れられたように記憶しています。もっともっと、こちらの側面を追究すべきであると。私もまったく同感で、「宗教的自然観」の問題を扱ったのも、そのような意図からでした。どうして宗教は「信じられない」のか、あるいは、「信じたくもない」のか、という観点から迫ることで、日本の文化的な宗教性について、いっそう明らかにすることができるはずだと、私も思っています。具体的な研究へとつなげていきたいなあ、と強く思いました。

おわりに

時というものは変幻自在に漂うもののようにです。それは、この世においては長くもなり短くもなり、濃くもなり薄くもなります。だからこそ「永遠」が希求されるのでしょうか。本研究会の歩みを振り返るにあたって同じことで、10年という時の流れ自体に絶対的な意味があるわけではありません。次の一步を踏み出そうとする意思を確認するところに意味があるのでしょうか。「あなたの庭で過ごす一日は千日にまさる恵みです。」と聖書にあるように(詩編 84)、研究会のメンバーお一人おひとりの今後の活動が、お互いにとって「千日にまさる恵み」でありますように、と祈念したいと思います。

「宗教心理学研究会—10年間の外部発信を振り返る—」 の話題提供を終えて

松田茶茶(関西保育福祉専門学校)

第10回目を迎える今ワークショップの話題提供の中で、“研究発表会、公開シンポジウム、公開講演会に関する報告”をおこなってほしいと事務局から依頼を受け、「ああ、そういえばこの研究会に入会して、私は10歳も年をとったんだなあ」としみじみ感慨にひたり、しげしげと手鏡をのぞき込み、お引き受けしました。

“10年間の外部発信を振り返る”とのサブタイトルをつけましたが、研究会は10年目を迎えるわけですから、学会当日の時点で振り返れる月日は9年間しかありませんでした。が、せっかくの記念回に“9年間の……”と標記するのも野暮ですので、看板に偽りありますが、厳密に言えば9年+αを概数として自分に言い訳をしました。そして“研究発表会”、“公開シンポジウム”、“公開講演会”をまとめて“外部発信”と表現してみました。すると、外部発信にはその三つの他にも、“国際シンポジウム”、“「宗教と社会」学会テーマセッション”という番外編があったため、「ええい！もう全部まとめてしまえ！！」と乱暴な行動に出てしまいました。これが良かったのか悪かったのか、事務局からは何もお小言を言われませんので私には判断しかねますが、ともあれ力業でまとめてしまったことには反省をいたしております。

さて当日、話題提供に許された時間は15分でしたので、過去の外部発信についてざっとまとめた資料をただ目で追い声に出すだけで終わってしまいました。様々な種類の外部発信がおこなわれたのには、それぞれに背景があるわけですが、時間的になかなかそこまで触れることができず、また、研究会の運営内容に関わることでありますので、私の発表からは割愛しました。以下が、これまでの外部発信の種類と開催回数です。

～定例開催～

○研究発表会(日本心理学会年次大会ワークシ

ョップ)——全10回

○公開講演会(旧公開研究発表会)——全4回

○公開シンポジウム——全1回

～番外編～

○国際シンポジウム——1回

○「宗教と社会」学会テーマセッション——1回

いずれも、研究会としておこなう研究活動の成果の発信ではなく、本研究会に所属/参与するメンバーの個々の活動や研究成果等を、その都度設定されたテーマに沿って集合的に発信するものであり、また、発信するのはメンバー本人でありました。したがってこの足掛け10年に、全17回の機会を通し、本研究会の“マンパワー”の外部発信をおこなってきたと言えます。本研究会のホームページのトップには“日本における宗教心理学的研究の活性化をめざして、...(中略)...心理学・社会心理学・社会学・宗教学など、様々な分野の研究者による交流の場と...(後略)”と記され、その学際性を標榜していますが、その通り、17回を通じて心理学、宗教学、神学、社会学、哲学、教育学、看護学、福祉学...細分化すれば書ききれないほど多岐にわたる分野/領域の先生方がご登壇なされました。これは、本研究会の学術界におけるスタンスを表すものと感じられます。そしてマンパワーを示すことで、本研究会がどれほどの可能性を秘めた組織であるか、どのような展望が期待されるかについて、宗教心理学的研究の意味・意義とともに、まずは“周知”という成果を着実に上げてきたのではないかと思います。

外部発信をおこなう度、事務局はてんでこ舞い、しかしきりきり舞いに呼応するかのように研究会への参加者が増えてきたことは、何をさておき、事務局 松島氏のお人柄、ご人徳の為せるものだと思います。こうして今回の話題提供を終えて、改めて事務局のご苦労と、本研究会のもつマンパワーの素晴らしさへの畏敬の念のようなも

のがこみ上げてきました。この約 10 年間、みなさまお疲れ様でした。そしてこれから永劫、よろし

くお願い申し上げます。

今、問われる「宗教」の役割

中尾将大(大阪大谷大学)

2012 年 9 月に専修大学において日本心理学会第 76 回大会が開催された。大会 3 日目にワークショップ「宗教心理学的研究の展開(10)—宗教心理学研究会発足 10 年目を迎えて—」が開催され、筆者は話題提供者として登壇し、「ニューズレター」の報告をさせていただいた。このたびの大会では筆者が参加した WS 以外にも多くの宗教心理に関する企画が開催され、大会最終日にも拘らず多くの方が午前中から参加していた。研究会事務局の松島公望さんとも話をしていたのだが、このような現象は宗教心理学研究会が発足した 10 年前では考えられないことであった。それだけ「宗教」という事象に少なくとも心理学者が注目するようになったということを反映する現象と言えらるだろう。

それはそのまま、多様化する現代社会の中で今こそ、「宗教」の役割が問われているともいえるだろう。我が国はこれまで世界でも類を見ないくらい科学文明を発達させ、科学技術を駆使して便利で、快適な環境と生活を手に入れた。その影響は世界にも及び、「ジャパンスタイル」と称され、経済やファッションなどあらゆる分野にも浸透しているといえるだろう。現代の科学技術をもってすれば何もできないことはないようにさえ思えてくる。しかし、何もかもが思い通りにできるのだろうか。

一方で、我が国では自殺者が年間三万人を超え、うつ病に代表される精神疾患におかされる者が増え、さらに都会の片隅で人知れず死んでゆくいわゆる「都会の孤独死」など、自らを自らの手で葬り去るような現象が起こっているのも事実である。強力な科学技術と高度な文明を手に入れた現代人だが、「何もかもが思い通りに」とはいかないようだ。同時に、現代の日本人は言いようの

ない「虚無感」におそわれているといえないだろうか。物理的にはいくら快適で便利な生活を手に入れても満たされない「何か」がある。物理的豊かさをいくら積み上げてどうしても埋まらない「何か」がある。筆者は現代人が科学技術をもってしても埋めることが出来ない「何か」とは「言いようない虚無感」ではないかと考える。そしてそれを埋めることが出来るのが唯一「宗教」ではないかと考えている。

世界には実に多くの宗教が存在するが、「世界三大宗教」として、仏教、キリスト教、イスラム教を挙げることが出来るだろう。それぞれの教義や立場には多種多様なものがあるが、共通する部分もある。どの宗教にも説教師がおり、それぞれの立場から教えを説いているのだが、その目的とするものは「人間を幸福へと導く」ということではないだろうか。筆者はプロの宗教家ではないのであまり正確なことはいえないが、それぞれの宗教には「幸福に至るための術」が具体的に示されていると考える。例えば、仏教ではあらゆる行法が説かれ、それを実践することで人生の苦しみを解決し、精神的安らぎの境地に到達できるとされる。キリスト教では愛を説き、愛の行為を実践し、自らの罪を悔い改めたものがイエス・キリストによって救済されると説く。イスラム教ではアラーを唯一の神とし、多くの戒律が設けられ、愚直なままでその戒律を守り、実践することで死後、天国に生きる(救済)とされる。仏教以外は「神」という人智を超えた存在を想定し、その存在とのつながりを持つことが重要視されている(ただし、仏教でも浄土教では阿弥陀如来という超越的存在を想定している)。例えば、「祈り」という行為があるが、それは人智を超えた存在との交流をするための術と言えるだろう。

以上から、「科学技術・高度な文明」と「宗教」を比較してみると、次のようなことがみえてくるのではないかと考える。科学技術や文明によって、物質的なものを積み上げて得られるのは単に「欲望を満たすこと」だけなのかもしれない。その喜びは一時のものでしかないのではないか。一つの欲望が満たされればまた次の欲望を満たさねばならなくなる。しかし、宗教によっては物質的なレベルを超えて、人生の苦悩をなんなく超えてゆき、真に己を生かすことができるのではないだろうか。例えば、ブータン王国の国民は先進国よりも物質的には豊かではないが、国民総幸福量（GNH）は世界一である。彼らはチベット仏教を厚く信仰し、その教えは生活の隅々にまで浸透していることは周知の事実である。人類は己の力に慢心し、「科学技術や高度な文明」と引き換えに、最も大切な「己自身」を見失ってしまったのではないだろうか。今こそ、宗教を通じて、人智を超えた大いなる存在（神、大自然、宇宙、あるいは命）との交流を果たし、己自身を振り返り、己を取り戻す時ではないだろうか。それは今後の人類の生きる指針を取り戻すことに他ならないのである。

筆者は現代人の姿は「バベルの塔」を築いたとされる古代人に似ていると思う。旧約聖書において人類は天にまで届くように「バベルの塔」なるものを築き、その最上階から天に向かって矢を放ち、神になろうとしたとされる。しかし、思い上がった人類の心を見て、神は怒り、雷いかずらを落として、バベルの塔を破壊し、それまで共通とされた人類の言語をバラバラにして世界中に人類を分散させたという話である。現代人は、このバベルの塔を作ったとされる古代人と同じ精神構造ではないかと考える。現代の「バベルの塔」は高度な科学技術や文明と置き換えられるだろう。そうすると、多くのことは統制することが出来るとし、ある意味人類は神に成り替わろうとしているのかもしれない。しかし、公害、ネットによる犯罪、精神病や自殺の増加など、神のもたらした「雷」がまさに人類に降りかかっているのではないか。その結果、現代人は孤独感、虚無感に陥り、自らを自らの手で葬り去っているのである。そういった意味では現代

人も古代人も基本的にはあまり変わっていないのかもしれない。

何でも自分の思い通りになる、自分のコントロールの元で事態を変えることができるようになれば、人間は慢心し、自滅への道をたどるのだろう。しかし、宗教による信仰をすることで人は自らを振り返る。すなわち自らの至らなさ、未熟さ、愚かさが見えてくる。「この世界の中で自分なんてものはなんというほどのことないものである」、そのように謙虚になれるのではないか。そして、「生きる自分」から「生かされている自分」へと視点が転換されることだろう。さらに生きる希望、生きてゆくための原動力、苦しみ耐えることのできる力、他を生かす力、生きていることの喜びなども得られるものと考えられる。

ワークショップ後半の質疑応答で「宗教心理学はどの分野にまでそのすそ野を持つのか」という質問があった。司会の松島さんはなぜだか登壇者の中から筆者を指名して応答するように促した。咄嗟のことで筆者は返答に困った。どのような返答をしたのか未だに覚えていないのだが、自然に口をついて出てきた言葉がある。それは、「宗教は人間の根源的なものであり、それなしでは生きてゆけないのである」であった。それは我が国の歴史を振り返ってもわかることではないか。宗教が全く存在しなかった時代はないのである。筆者のその一言に共感してくださったのかどうか定かではないが、東洋大学名誉教授の恩田彰先生がコメントをされた。その内容は、実は現代人も宗教が大切なものであることはよくわかっているのである。それなしでは生きてゆけないことも実はよくわかっているのである。だからこそ、あえて、目を背けているのではないか。つまり、「真実を知るのは恐ろしいのではないか」ということである。それこそが、現代人が宗教を無視しようとしたり、見下している原因なのかもしれない。（ワークショップ終了後、恩田先生に敬意を表して、握手を求めたところ、快く柔和な笑顔とともに受けて下さったことは筆者にとって望外の喜びであった）

今こそ、現代人は物理的要因を超越し、自らの内に信を起し、人智を超えた大いなる存在と

の交流を目指すべきではないだろうか。その時、各人が不可思議なる力に導かれ、全く新しい世界観がそこに広がってゆくことだろう。その水先

案内をしてくれるのが「宗教」であり、それこそが「宗教の役割」ではないかと思うのである。

宗教心理学と私、そして宗教心理学の新たな可能性

島 蘭 進(東京大学)

フロイトやユング以来の発達心理学や臨床心理学に通じるタイプの心理学と宗教研究の交流はコンスタントに続いてきたと思う。私自身も宗教学科の卒業論文で「フロイトと宗教」を主題とし、その後、教祖論にエリクソンのルター論やガンジ一論を応用しようと試みた。そして、2001年には教育学者で、『エリクソンの人間学』(東京大学出版会、1993年)の著者である西平直氏とともに『宗教心理の探求』(東京大学出版会)を編集、刊行した。

他方、1970年代に始まる「精神世界」の運動については、長らく関心を抱き続けてきている。日本で「精神世界」とよばれているものはアメリカでは「ニューエイジ」とよばれることが多い。個人化が進んだ先進国で顕著に見られる運動で、「宗教」とよばれてきたものに違和感を感じるが、「スピリチュアリティ」は重要だと考える人々が担い手だ。これは宗教運動の新しい形態とも見ることができるものだが、しばしば心理学の影響を受けている。トランスパーソナル心理学はその代表的なものだが、心理学であると同時に新しいタイプの宗教、あるいはスピリチュアリティと見なされるものだ。

私はこの「新しいスピリチュアリティ」(新霊性運動・新霊性文化)の動向を注視し、現代宗教の行方に深く関わるものと見なしてきた。この方面での私の研究関心は「宗教を心理学によって研究する」というよりも、「宗教と心理学が重なり合うような領域を歴史的に研究する」というものだ。これは必ずしも近年のみの現象ではない。遅くとも近代化とともに頻繁に起こってくる現象で、井上円了の「妖怪学」、森田療法、吉本内観などが日本での興味深い例だ。また、近代日本では、新宗教

の中にも伝統仏教の中にも心理学に大きな影響を受けた人物や運動が多々見られる。

さらに、2000年代に入ってから、私の研究領域には「死生学」が大きな位置を占めるようになっていった。死生学ではキューブラー・ロスに代表されるように死にゆく者の心理が問われたり、フロイトの「喪の仕事」の理論と関わって死別の悲しみが大きな題材とされる。また、個人々がどのような死生観をもっているかは心理学的な考察の対象とされることが多いが、それもまた宗教との関わりも深い。

死への恐怖や死の願望、あるいはグリーフなどの語が身近になっている現代人だが、かつては宗教的表象を通して死に向き合ってきたのであり、今でも宗教的表象抜きに死の心理を考察することはできないだろう。宗教心理学と死生学も大いに関わりをもつのだ。

以上のような私の研究関心は、「宗教を心理学によって研究する」宗教心理学の主流から見れば、周辺的なものかもしれない。だが、21世紀に入った現代では、「宗教を心理学によって研究する」主流の宗教心理学も、ここまで述べてきたような研究領域を身近な問題として取り上げようとしているのではないか。

2011年9月13日の日本心理学会ワークショップ「宗教心理学研究会の展開(10)——宗教心理学研究会発足10年目を迎えて」に参加して、私はその感触を強めた。これは宗教心理学が自分の関心領域に近いと感じる人の幅がかなり広がってきていることを意味するものでもあるだろう。たとえば、「仏教心理学」や「瞑想の心理学」は成長株の一領域だ。だが、これは私が関心をもってきた諸領域のいずれとも深い関わりがあ

る。認知科学や進化心理学と宗教研究の接点もますます増えている。

宗教心理学がこうした関連領域を包み込んで発展していくとすれば、その可能性はたいへん大

きなものとなるのではない。心理学の諸領域からも注目を浴びる領域になる可能性があるのではないだろうか。そんな期待をふくらませる機会となったワークショップだった。

どのようなテーマが浮上し共有されたのか

葛西賢太(宗教情報センター)

2012年9月11日から13日の日本心理学会では、「宗教心理学研究会」の10回目のワークショップが行われた。

今回のワークショップでは、新参者の多様なアプローチを許容する雰囲気の良い、会としての継続活動の意義が確かめられた。宗教の心理学的研究の意義をこの学会の中で繰り返し示してきた努力。松島公望氏が中心でなければなかなかこのようには続かなかったという点で、多くの人が同意されるだろう。長期に事務局を支え続けた熱意と努力にも、頭が下がる。

いっぽう、今回のワークショップには、わたくしとしては不満もあった。この9年間の間の諸活動はまんべんなく列挙されたものの、どのようなテーマがより重要なものとして浮上し、共有されたのか、という確認がなかったのではない。当日わたくしはコメントを求められて、「ビジネスミーティング(学会の研究グループなどで行われる業務報告・調整の会議)のようだ」と評したが、それは、これまでの研究会や公開講演会で行われてきた報告が網羅されてはいても、それを踏まえて、この研究会でご自身が何をしていきたいか、そもそも、なぜ集まるのか、は聞けなかった。研究上の関心が響き合っているはずなのだが、それを明確な言葉にし、今後の課題として確認する時間があるべきだったのでは。報告をされた方々はそれぞれ熱意をもって会の良さを語ってくださったのだが、その中で、ご自身は何をやったのか、そのテーマを共有できる仲間と出会えたか、現在の仲間とどのようなことをやっていきたいか、そのあたりを遠慮せずお話しいただいてもよかったのでは、と感じられた。

「宗教」概念は多様なものを含んでおり、歴史的に色づけられてもいるので、「宗教心理学」の指すものが何なのか(「宗教心理学」と呼んでいられる対象にはメンバーによってずれがあるはずだが、どの部分を研究会で共有し強化するのか?)などは、自覚的に構成する必要があると思われる。研究会のメンバーの活動を狭めるのではないが、諸活動のうち的一点を深化させる、そのような集約のあり方が可能なはずである。私のコメントでは、現代人の「不可知論的態度」(自称「無神論」も含む)こそ、心理学的手法が活かされる研究テーマの一つなのではないか、という提案もさせて頂いた。

今年の学会では、「マインドフルネス」の語の含まれる部会がいくつもあったことに気づかれると思う。これは当研究会と直接は関係がない。瞑想を医療の疼痛緩和に応用した技法 MBSR (Mindfulness Based Stress Reduction)の開発者ジョン・カバットジン(マサチューセッツ大学医学部)を11月に招聘したのだが、私も含め、招聘委員の申し合わせで、心理学会にもマインドフルネス部会を入れてもり立てようということになったのだ。招聘のためのすりあわせと、事前セミナーと、心理学会とで、マインドフルネスというテーマに関心を持つ多くの研究者と出会うことができた。心理学会では、私は「仏教と心理学の対話」と題したワークショップで発題したが、そのほか、早稲田の春木豊先生・越川房子先生のチーム、広島大の杉浦義典先生のグループや琉球大の伊藤義徳先生などが、マインドフルネスと心理検査・心理療法を組み合わせるモデルを提示さ

れるワークショップを展開された。これらをとおして、仏教に限定されないマインドフルネス概念の心理学的モデルがいくつも提示され、関心をもち応用も検討している方々にとって具体的に資するものであった。一連の「マインドフルネス」部会の経験は、集約ということがもたらす可能性につい

て学ばせるものであった。

これらの内容については、宗教情報センターのウェブサイト(<http://www.circam.jp>)にまとめた紹介をしているので、関心のある方は是非ご覧いただきたい。

日本心理学会第76回大会ワークショップ「宗教心理学的研究の展開 (10)―宗教心理学研究会発足10年目を迎えて―」に参加して

岡田正彦(栃木県立岡本台病院)

まずは、宗教心理学研究会設立 10 周年、おめでとうございます。衷心より、お祝い申し上げます。

さて、2012 年 9 月 13 日(木)は、仕事の調整をつけ、職場より遅い夏期休暇をいただき、日本心理学会第 76 回大会ワークショップ「宗教心理学的研究の展開(10)―宗教心理学研究会発足 10 年目を迎えて―」に参加させていただきました。

私は、宗教心理学研究会主催のワークショップの前の午前中のワークショップ、即ち、「心理学において宗教についての研究がどういふふうに必要なかを考える」にも参加させていただいておりましたので、そこでの興奮も引きずりながらの参加でした。

本ワークショップは、松島先生の企画により、4 名の話題提供者、即ち、西脇良先生、松田茶茶先生、中尾将大先生、酒井克也先生より、それぞれの御担当、関わりから本研究会の 10 年間で振り返られ、2 名の御高名な指定討論者、即ち、島藺進先生並びに森岡正芳先生より、それぞれの御専門の立場から指定討論がございました。

まず、西脇先生は、松島先生と御一緒に、本研究会立ち上げに御尽力下さり、その経験を基に、「研究会発足時の様子および 2005 年度科研費プロジェクトに関する報告」がなされました。

次いで、松田先生より「10 年間の外部発信を振り返る」というテーマで、研究発表会(日本心理

学会年次大会ワークショップ)、公開講演会(旧公開研究発表会)、公開シンポジウムが時系列で報告され、番外編として国際シンポジウムと「宗教と社会」学会テーマセッションについて触れられました。

また、中尾先生からは、「ニューズレターの変遷から『研究会 10 年の歩み』を振り返り、迎える『発足 11 年目を迎える方向性』を模索する」のテーマの下、第 1 号から最新号(第 16 号)について纏められた資料を傍らに、「ニューズレターの基本的構成と活用法、および将来の形」と「変遷から見えてくる研究会展開の姿」についてまで触れられました。

更に、酒井先生からは、2011 年 9 月 16 日に第 1 回目を開催致しました懇話会、それを基盤にして 2011 年 10 月 29 日に第 1 回目を開催し現在進行形的に回を重ねておりますワーキンググループ、そして東京における勉強会と、関西地区における研究例会について報告がなされました。

上述の 4 名の話題提供者からの報告の後、島藺先生並びに森岡先生からの、宗教学・死生学の視点並びに心理学の視点からの指定討論が行われました。

本研究会の 10 年間の歴史を、多彩な活動のカテゴリーから、コンパクトに纏めて御報告いただいたものの、それでも非常にボリュームのある内容でございましたが、本研究会の発足から 10 年間のあゆみの全体像を把握することが出来、

今後の本研究会の展望を垣間見ることが出来るワークショップでした。

ところで、今回のワークショップに参加させていただいて、刺激を受けまして、読み直せる範囲内でニューズレター等の資料に目を通してみようと、私が保管しております本研究会の資料を振り返ってみましたところ、私宛の本研究会への入会に関する松島先生からいただいた最初の文書が出てきて、日付が2005年9月5日になっておりました。

既述致しました西脇先生の話提供の際の当日資料によりますと、本研究会は「2003年7月のメーリングリスト立ち上げをもって発足」となっておりますので、私が本研究会に入会させていだきましたのは、発足約2年後だったようです。約8年間弱、非常に価値ある本研究会の会員でいささかいただいたこと、そして話提供にございましたような多彩なイベントに参加させていだきましたこと、大変光栄に思っております。

しかも、入会2年後の第71回日本心理学会におきましては、「宗教心理学的研究の展開(5)―社会との関わりの中からはたらく宗教心理学の可能性―」と題されたワークショップに松島先生、橋本先生と御一緒に登壇させていただき、今思えば、ただの一臨床家が、厚顔無恥、怖いもの知らずで、当時企画を担当されていた松田先生のお誘いに、気軽に、本当に気軽にのってしまい、ただ(宗教学的)宗教心理学を専攻した者がどのような臨床を展開しているかを紹介しただけに留まってしまい、御迷惑をお掛けしたのではないかと、「穴があいたら入りたい」といった気持ち

が心一杯に生じたことを思い出しました。

しかし、上述のような体験を自らさせていただいて、「本研究会は、宗教心理学を愛する(と言ってもは大袈裟かもしれませんが、興味・関心がある)者であれば、経歴や力量に関係なく、真剣に聴く耳を持って下さる場所なんだ」ということを、経験的に理解することが出来たエピソードでもありました。上述のような雰囲気は、私が、現在専門的に関わらせていただいているアルコール臨床の中で、アルコール依存症からの回復にとっても重要だと言われているセルフヘルプグループのそれに酷似しておりました。そのためか、上述のような出来事が、私にとって、本研究会参加への敷居を非常に低くして下さり、図々しく、時間があれば、ワーキンググループや勉強会等に、まるでアルコール依存症からの回復を願うクライアントがAAや断酒会といったセルフヘルプグループにせっせと通うように、私も本研究会に参加させていただいている次第です。

このエピソードを切っ掛けに、松田先生に紹介者になっていただき、2007年に日本心理学会にも正式に入会させていただいた次第です。今までは、どちらかというと日本カウンセリング学会や日本アルコール関連問題学会のような実践的な学会に所属しておりましたので、老舗で実証的な日本心理学会への入会は、とても視野が拡がり、勉強になっております。

本研究会も、今後は宗教心理学会へと成長していくのかもしれませんが、現在の研究会の雰囲気を残しながら発展していくことを祈っております。

大切なものを求め続ける仲間たち

森 真弓(東京都スクールカウンセラー)

―――常に「宗教心理学とは何か」を問い続け、苦しみ悶えながら歩んできた10年とも思える―――と、ニューズレターの変遷を読み込んだ中尾さんは述べています。それはもちろん研究会の姿ですが、私にはリーダーである松島さんの姿

が思い浮かびます。松島さんは、荒川さん企画のWS「心理学において宗教についての研究がどういうふうに重要かを考える」において、自らの話題を「宗教心理学からの挑戦――21世紀の心理学を展望する――」と題し、次のように述べ

られました。

●「心理学の責務——人間の根源的な部分を大胆に求める」(松島さん)

——宗教は心の中にある「大切な世界」。それを捨象してしまわない！ 信仰者に限らず誰もが心の中にかげがえのない「大切な世界」を持っている。対象者の中心的なものを排除した世界って何なのか？心理学は人間の大切な世界を追わなくていいのか？いじめ問題や震災の傷の只中で、生きる指針を求めている社会からの要請でもある。広く捉えようとしなくて信仰者に注目してもよいのではないか。人間の心の根源的な部分を大胆に求めていきたい——

●「宗教はいかがわしいというのは抑圧です！」(恩田先生)

そして、本研究会のWSにおいて、恩田先生は次のように述べられました。——一般に宗教はいかがわしい、気をつけろと言ひ、避けようとしませう。人間にとっていちばん大事なことだと分かっているからこそ避けているんですよ。どうでもいいことなら放っておくだけです。真実を知るのがこわいから抑圧する。私たちは大事な問題に取り組んでいるんですよ。それを自覚するべきです——本研究会直後のWS「心理学における仏教の影響—過去と展望—」(葛西先生が話題提供者の1人)においても、フロアにいた認知心理学の先生が次のように述べられました。

●「人間にとってプラスになることを社会に対して発言すべき」(仏教のフロアにて)

——現代の自我の在り方への批判をきちんとしていくべき。必ずしも幸せになっていない私たち。原発問題にしても、自分が儲ければよいという自我の結果ではないか。心理学的視点からは

こういうことが言えるのではないかということをして社会に対して発言すべき——それに対し、臨床心理学の先生が「道徳的な声をあげることを今までは抑えていた。でも認知の先生からそう言われて勇気が出た」と応えられました。

松島さんの言葉で熱くなり、恩田先生の言葉に涙が出そうになり、3番目のWSでは静かなる勇気が湧きました。日ごと研究色が褪せていく私は、研究方法や測定の問題点等の全体像が、よく分かっていません。けれども、量的研究に向いている松島さんのスタンスを支持したいという思いが常に私の中にあるのは、「人間にとってプラスになることを社会に対して発言する」ことを目指し続けている心、より発言力を高めるために！という心が伝わってくるからなのだと思います。

本研究会の会員の層は様々だなあと感じます。質的研究者 VS 量的研究者、宗教学 VS 心理学、学者 VS 臨床家、大学の先生 VS 学生などなど。しかし、量的研究が質的研究に勝っているという空気もなく、特定の宗教を持っている人をそうでない人がいかがわしいと見ることなく、知識や思索の深い人がそうでない人を蔑むことなく、ただそこに存在している尊い人間として見ているように感じます。「大切なものを求めている貴方だから、大切なものを求めている私が側にいて、道を間違えないように見張っていよう、時に励ましていこう」という「眼差し」があるように思います。「はみだし者(?)の私が所属欲求を満たす場所がこれまで何処にもありませんでした、この会との出会いは私の必然でした！」という「叫び」もあります。10年目の歩みを共に出来る幸いをかみしめつつ、私の心に残った言葉と仲間たちの紹介でした。

事務局からのお知らせ

宗教心理学研究会ニューズレター第 17 号が発行されました。今回の内容は、「第 10 回研究発表会報告」、「発表者・参加者からの感想」となっております。今号も会員の方々よりご寄稿いただき、非常に充実した内容となっております。これからも研究会に対する会員の皆さまからのご意見、ご感想をお待ちしております。(K.M)

[宗教心理学研究会の今後の予定]

2013 年 3 月

第 1 回関西地区勉強会開催

2013 年 4 月

日本心理学会第 77 回大会ワークショップ申し込み

2013 年 9 月 19 日(木)～ 21 日(土)

日本心理学会第 77 回大会ワークショップ(第 11 回研究発表会)開催

[開催校:北海道医療大学心理科学部 会場:札幌コンベンションセンター]

発行:宗教心理学研究会

編集:宗教心理学研究会事務局

研究会事務局

担当:松島公望[psychology-religion@office.so-net.ne.jp]

研究会ホームページ管理・運営

担当:横井桃子[psych.religion.web@gmail.com]

研究会ホームページ

http://www.geocities.jp/psychology_of_religion_japan/